



猿さる

廻まわ

し

笑福亭 松 鶴

桂 米之助 繪

エ、一席は御酒のお噂を申し上げます、お酒と云ふ物は具合の宜しいもので、酒なくてなんの己れが  
 櫻かなと申します。櫻を見に参りましてもお酒を飲んでるので宜しいが、櫻を見に行つて風邪薬を煎  
 じて飲んで居りましても面白うおまへん、松鶴は何う不器用に産れましたのかお酒がチョットモ戴け  
 まへん、盃に一杯飲みますと胸がドキ／＼致します、二杯飲みますと顔が赤ふなつて、三杯飲むと嬉  
 しうなつて、四杯飲むと氣が落附ひて、モウそれから何杯飲むかは後は解らんようになります、お酒  
 を飲むのか飲まぬのんか解らん男で、お年を召しましたお方は酔ふと身體を後へお引きになります、  
 お若いお方は勢いが違ひますので前へ出なはる、後へ引くお酒は上品で宜ろしいが前へ出るお酒は何

や遠乗りの馬みたいに口の邊へ唾を溜めて身體を斜かいになつて額で彼方を睨んで一人で八人歩きと  
 云ふ歩きかたで、彼方よつたり此方へよつたり合して八人歩き

「ヨイトサノサちうやつちや、ア、酔ふたなア『お酒飲む人眞から可愛お神酒あがらぬ神はない』ち  
 うて、又宅へ歸つたら親父つさんのお眼玉や、内の親父は能う怒りよるな、あら空消親父と云ふね、  
 『親父入れる様な火消壺怒るたんに蓋をする』か、何うぞ歸つて親父さんが寢て居てお母さんが  
 起きてゝ呉れたら宜いがなア、親父寢のお母ん起き、お母ん寢の親父起をやつたら薩張りわやゝ、  
 モウ内の門まで來てるで、チョツとお開け（トン／＼）お母はん（トン／＼）チョツと開けとくな  
 アらんか、お母開けてんか母者人、昔の娘はん、今では皺くちやのお婆はん、チョツと開けとくな  
 はれや（トン／＼）もうし」

「コレ婆どん又極道が酒に酔ふて歸つて來よつた、毎晩／＼遅う歸つて來て表の戸をドン／＼と敲き  
 くさつて喧ましい、私は御近所へ面目ない。昨夜も昨夜とて遅う歸つて來て私が寢てたら頭をボン  
 と蹴りくさつたので頭を蹴つたなと思ふてると疊へ頭を擦り附けてア、勿體ないと思ふてるので、  
 ア、酒の酔は本性たがわずぢや親の頭ぢやと思へばこそ誤つてよるわいと思ふて居た、朝起きて忤  
 に云ふたら彼れはお父つさんの頭でしたんか、お前何やと思ふたと云ふたら私は又瓢單かと思ひま  
 したと、それでも疊に頭を附けて詫つて居たやないかと云ふたら、イ、エ瓢單の詰が抜けて酒が零